

(8) 山 <sup>やま</sup>ノ <sup>うえ</sup>上 遺 跡

## 目 次

I. 遺跡の立地と環境.....	463
1. 位置と地形.....	463
2. 周辺の遺跡.....	463
II. 調査の方法と経過.....	466
III. 発見された遺構と遺物.....	466
1. 遺跡の基本層位.....	466
2. 壴穴住居跡.....	468
3. 溝.....	479
4. 遺構以外からの出土遺物 .....	480
IV. 遺構、遺物に関する考察.....	481
1. 出土土器の分類.....	481
2. 出土土器の年代.....	485
3. 壴穴住居跡の年代.....	487
4. 壴穴住居跡の考察.....	488
V. ま と め.....	488

## 調査要項

遺 跡 名：山ノ上遺跡

遺 跡 記 号：B I (宮城県遺跡地名表登載番号：49013)

遺跡所在地：宮城県栗原郡志波姫町堀口字西風前

調査対象面積：約 4,140 m<sup>2</sup> (発掘面積 1,341 m<sup>2</sup>)

調査期間：昭和49年10月7日～11月8日

調 査 員：宮城県教育庁文化財保護課

白鳥良一、恵美昌之、青沼一民

## I. 遺跡の立地と環境

### 1. 位置と地形

山ノ上遺跡は栗原郡志波姫町堀口字西風前に所在し、志波姫町役場より南西約2.5km、築館町との境界付近に位置する。

ここで栗原郡の地形を概観すると、西部には奥羽山地から南東に高度を減じながら延びる築館丘陵があり、東には北上山地が走っている。築館丘陵の北半は、迫川などの大小河川によって開析され、樹枝状に分岐する丘陵群が形成されている。

つぎに志波姫町の地形をみると、奥羽山脈と北上山地にはさまれた扇状地性低地(迫川低地)にあり、北部は一迫川によって形成された沖積地がなだらかな傾斜をもって広がり(標高12~23m)水田として利用されている。中央部および南部は平坦な台地となっており、台地の北端、東端部では舌状に突きだし、沖積地、段丘と接している。この台地は西から北東へと傾斜し、南部においては丘陵裾部と接し、比較的起状の高い丘陵が横たわっている。

さて、山ノ上遺跡は、志波姫町の南部、築館丘陵の裾部に位置し、標高30mの台地上に立地する。遺跡の南縁は熊谷川によって開析され急崖をなしている。現状は水田および宅地として利用されている。

### 2. 周辺の遺跡

本遺跡の立地する台地上および周辺の丘陵、沖積地には現在までに数多くの遺跡が確認されている。

縄文時代の遺跡としては、嘉倉貝塚、鰐沢遺跡、木戸遺跡などがあり、堅穴住居跡などが調査されている。

弥生時代の遺跡には宇南遺跡があり、土器棺墓と思われる遺構が検出されている。

古墳時代の遺跡としては鶴ノ丸遺跡、御駒堂遺跡、宇南遺跡などの集落跡がある。鶴ノ丸遺跡では方形周溝墓なども発見されている。

奈良～平安時代の遺跡には、糠塚遺跡、御駒堂遺跡、佐内屋敷遺跡などの集落跡や古代城柵擬定地である伊治城跡がある。

鎌倉時代以降の遺跡には、土墨、掘立柱建物跡などが検出されている鶴ノ丸館や日良館、刈敷館などの館跡があり、周辺からは中世～近世の板碑が発見されている。



第1図 周辺の道路



第2図 周辺の地形とグリッド配図

## II. 調査の方法と経過

東北自動車道は、山ノ上遺跡を横断して通るため、路線敷にかかる部分約4,000m<sup>2</sup>を対象に発掘調査を行った。

地区設定は、東北自動車道の中心杭STA491+80（仮原点A）とSTA492+00（仮原点B）を結ぶ線、およびこれに直交する線を基準線として行い、調査区全体を3m単位のグリッドで区画した。グリッド名は東西方向をアルファベット（A～X）、南北方向をアラビア数字（1～21）で表わし、両者の組み合わせで呼ぶことにした。

調査は昭和49年10月7日に開始した。まず遺跡における基本層位、遺構の分布などを把握するために、1グリッドおきにトレーナーを設定し試掘を行った。その結果E・G・Oトレーナーにおいて、黒褐色土の落ち込みが確認され、E・G・Qトレーナーから東側の部分は、開田の際地山面下まで削平をうけており、表土（水田耕作土）下がすぐ地山になっていることが判明した。次に落ち込みが確認された周縁部の拡張作業を行い堅穴住居跡3軒、溝2本を検出した。

10月22日から住居跡の精査に入った。住居跡は四分法による発掘を行い、堆積土については1/20の断面図を、平面形については、造り方を設定し、1/20の平面図を作成した。その後レベルの測定、写真撮影を経て、調査が終了したのは、11月8日である。

## III. 発見された遺構と遺物

### 1. 遺跡の基本層位

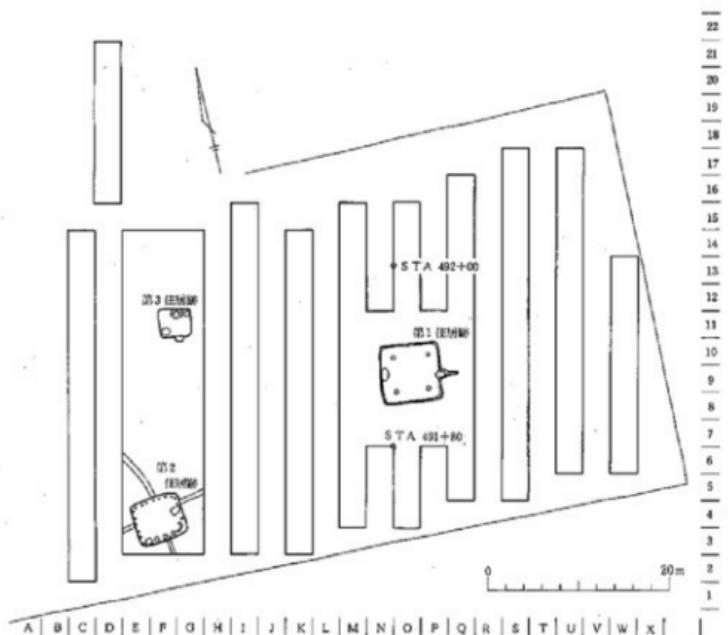
遺跡は水田および宅地として利用されていたため、調査区は開田の際にかなりの削平をうけQトレーナー以東では表土下がすぐ地山になっている。遺跡全体の層位をみると、東部分では表土（水田耕作土）下がすぐ地山の単層で、I区から西の部分ではわずかに第2層が認められる。

#### 〈第1層〉

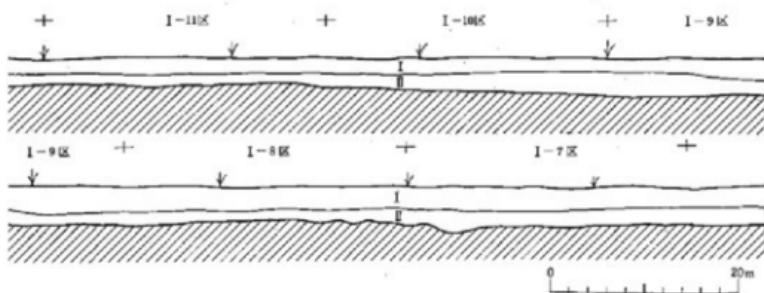
第1層は黒褐色（10YR<sup>2/3</sup>）粘土質シルトで構成される表土（水田耕作土）である。草木根や耕作などによりかなりの擾乱をうけている。分布は調査区全域におよび、厚さは20cm前後である。

#### 〈第2層〉

第2層は極暗褐色（7.5YR<sup>2/3</sup>）粘土質シルトで構成され、調査区西側でのみ確認される。厚さは約10～20cmである。



第3図 遺構配図



第4図 基本層位

## 2. 壁穴住居跡

### 第1住居跡（第5図）

【確認面】 N～Qの8～10区地山面で確認された。

【平面形・規模】 平面形は隅丸方形で、規模は長軸約6.6m、短軸約6.4mである。住居内面積は40.5m<sup>2</sup>である。

【堆積土】 2層検察された。第1層、第2層は住居跡全体を覆い、第2層は床面に達している。

【壁】 地山を壁としている。周溝からの立ち上がりはやや急で、残存する壁高は最も高い南辺で約20cmである。西辺を除いて各辺とも火熱を受け赤変し堅くなっている。

【床】 住居の四隅の部分を除いて地山を床面にしている。四隅の部分は住居の掘り方があり、掘り方埋土上面を床面としている。床面上には、多量の炭化材、焼土が散布し、炭化材は南東隅から北西隅にかけて顕著である。南辺沿いおよび北東隅から中央部にかけては、火熱を受け赤変し堅くなっている。ほぼ平坦である。

【柱穴】 床面から16個のピットが検出された。このうちピット1～4、8には柱痕跡が認められている。ピット1～4は住居の対角線上に位置し、配置、深さなどから柱穴と考えられる。

【周溝】 西辺中央部とカマドの部分を除いて巡っている。底面幅は約4～12cmで東辺北半の部分が最も広い。床面からの深さは約4～10cmで、断面形はほぼU字形を呈する。

【カマド】 東辺中央部に位置し、壁外に地山を約1.2m抉り込んで構築されている。燃焼部側壁は、一度地山を削ったところに灰白色粘土を貼り付けてつくられている。燃焼部内にも灰白色粘土の堆積がみられる。燃焼部底面は床面より約10cmくぼんでおり、約1.2m×0.5mの範囲に焼面がみられる。また、燃焼部の奥壁には高さ約5cmの段がみられ、煙道部が続いている。煙道部は長さ約1.2mで先端に向ってわずかに高くなっている。

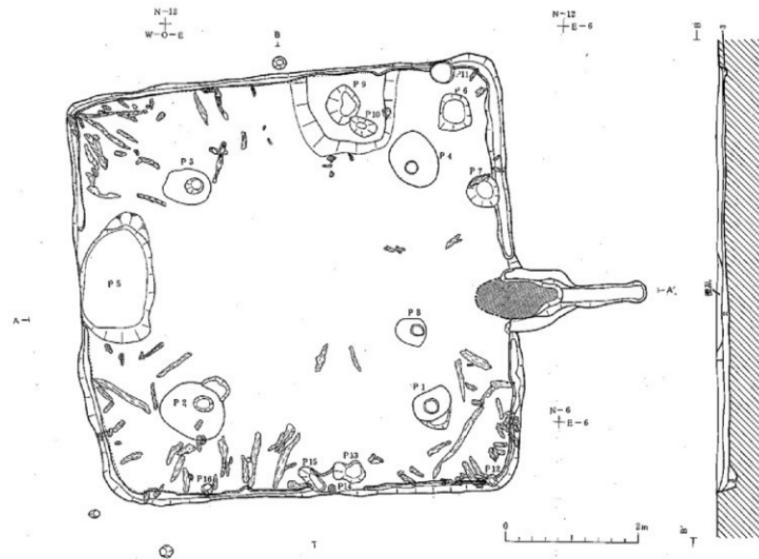
【貯蔵穴状ピット】 西辺中央部に接して検出され長軸1.8m、短軸1.1m、深さ約30cmで平面形は楕円形である。堆積土には炭化物を含んでいる。

【その他の施設】 北辺のほぼ中央部に接するように、長軸約1.6m、短軸約1.2mの範囲が床面より約5cm高くなっている。高まりの中央部には切り合う2個のピット(P9、10)がある。

【出土遺物】 住居に伴なう遺物としては、カマド内出土遺物、ピット内出土遺物、床面上出土遺物がある。

#### 土師器

壺（第6図1～4）1は体部内外面に稜をもち、稜から上の口縁部は外反している。2～4は体部から口縁部まで丸味をもつて外傾し、3は、口縁部が直立気味になる。底部はいづれも丸底である。器面調整は口縁部内外面に横ナデ、体部外面にヘラケズリ、内面にナデ（1、



層位	層底	土色	土性	標
第1層	1. 黒褐色 (10 YR 4/2)	シルト	炭化物を含入。	
第2層	2. 黒褐色 (7.5 YR 4/2)	シルト	炭化物・鐵素を含入。	
	3. 黒褐色 (7.5 YR 4/2)	シルト	粘土質の褐鐵土。	
カット内 堆積層	4. 深灰色 (5 YR 4/2)	クレイ	大糞堆积上。	
	5. 深灰色 (5 YR 4/2)	クレイ	4.が地盤を受ける際設けたブロック	
	6. 黑褐色 (7.5 YR 4/2)	シルト	炭化物を含入。	
	7. 黑褐色 (7.5 YR 4/2)	シルト	炭化物を含入・縦面内電極上。	
	8. 深灰色 (7.5 YR 4/2)	シルト	炭化物を含入・炭の層。	

第5図 第1住居跡

第1 住居跡 ピット一覧

ピット名	ピット1	ピット2	ピット3	ピット4	ピット5	ピット6	ピット7	ピット8	ピット9	ピット10	ピット11	ピット12	ピット13	ピット14	ピット15	ピット16
深さ	73	73	94	94	64	77	77	36	40							
土色	明褐色 10YR 4/2	褐褐色 7.5YR 4/2	褐褐色 10YR 4/2	褐褐色 7.5YR 4/2	褐褐色 7.5YR 4/2	褐褐色 7.5YR 4/2	褐褐色 7.5YR 4/2	黑褐色 7.5YR 3/2	褐褐色 7.5YR 4/2							
土性	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト
発考	炭化材盛入	埴山土盛入	炭化材盛入	埴山土盛入	炭化材盛入	埴山土盛入	炭化材盛入	埴山土盛入	炭化材盛入	埴山土盛入	炭化材盛入	埴山土盛入	炭化材盛入	炭化材盛入	炭化材盛入	炭化材盛入
ピット名	ピット1	ピット2	ピット3	ピット4	ピット5	ピット6	ピット7	ピット8	ピット9	ピット10	ピット11	ピット12	ピット13	ピット14	ピット15	ピット16
14	42	42	28	28	15	11	35	5	38							
質褐色 2.5YR 4/2	暗褐色 10YR 4/2	暗褐色 7.5YR 4/2	褐褐色 7.5YR 4/2	褐褐色 7.5YR 4/2	質褐色 2.5YR 4/2	褐褐色 7.5YR 4/2	褐褐色 7.5YR 4/2	褐褐色 7.5YR 4/2	褐褐色 7.5YR 4/2							
シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト
埴山土盛入	埴山土盛入	炭化材盛入														

2、4) 、ヘラナデ(3)が施されている。

甌(第6図5、6)最大径が口縁部にある。5は体部が直線部に立ち上がり、頸部でわざかに屈曲し、口縁部が外反する。器形としては長胴形を呈すると思われる。6は底部から口縁部までゆるやかに移行し、口縁部が外反し、いわゆる鉢形を呈すると思われる。器面調整は、口縁部内外面に横ナデ、体部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデ(5)、ナデ(6)が施されている。

#### 須恵器

坏(第6図7)体部から口縁部まで直線的に外傾し、底部は丸底風を呈し、口縁部内面には軽い段が巡っている。底部には回転ヘラケズリによる再調整が加えられている。

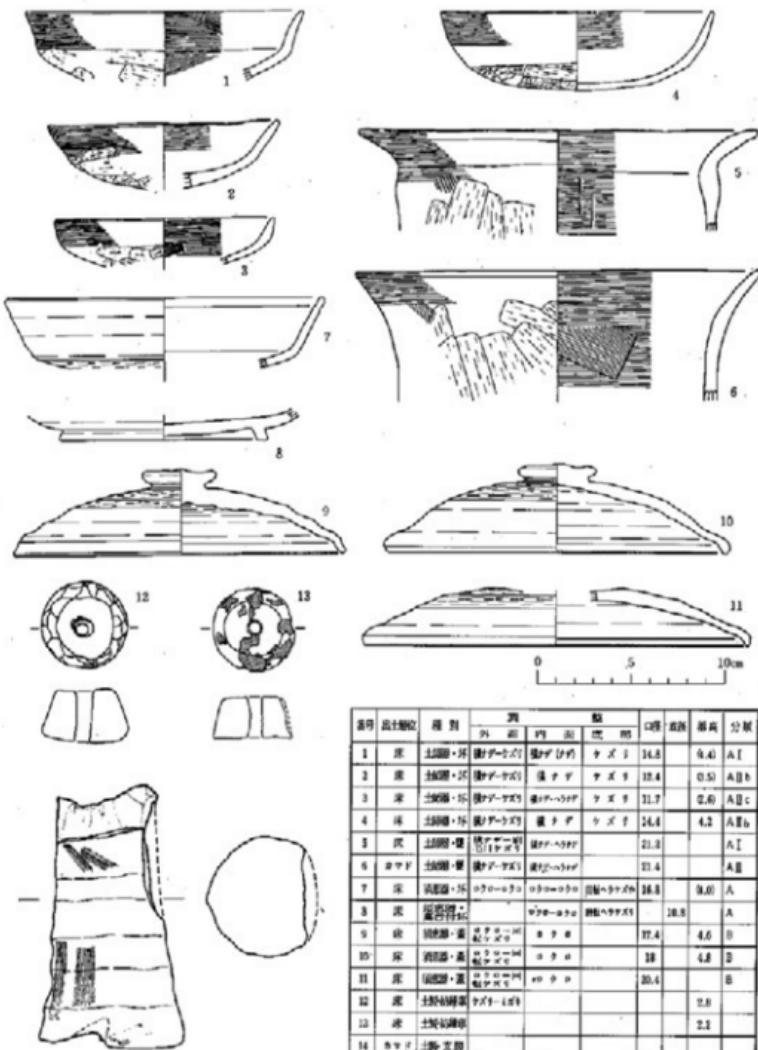
高台付坏(第6図8)底部と体部の境は丸味をもち、高台がわざかに外にふんばる。高台はあまり高くなく、脚端面はほぼ水平で、貼り付けによるものである。底部には回転ヘラケズリによる再調整が施されている。器形的には盤状を呈すると思われる。

蓋(第6図9~11)天井部から丸味をもちらながら口縁部に至り、口縁端部が下方につまみ出されている。天井部中央には扁平な宝珠形のつまみがついている(9、10)。天井部外面には回転ヘラケズリによる再調整が施されている。

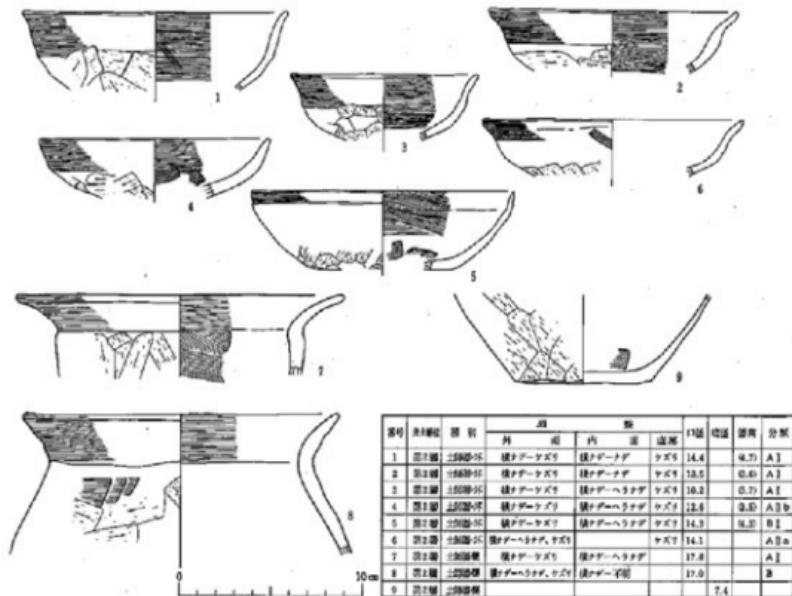
#### その他の土製品

紡錘車(第11、12)円錐台状をした土製紡錘車である。11は直径約4.5cmで、厚さは約2.4~2.8cmである。貫通孔は両面から穿たれ、最も径がせばまる部分で約0.7cmである。器面調整としてヘラケズリのうちヘラミガキが施されている。12は直径約4.4cmで、厚さは約2.2cmである。貫通孔は両面から穿たれ、最も径がせばまる部分で約0.6cmである。火はねをうけ全体に保存は悪く、器面調整については不明である。

支脚(第6図13)両端が破損しているため全体の形状は明らかでないが、棒状で末広がりの形態を呈すると思われる。



第6図 第1住居跡出土遺物



第7図 第1住居跡堆積土出土遺物

## 第1住居跡堆積土出土遺物

## 〈土師器〉

壺（第7図1～6）体部外面に稜をもつもの（1～3、6）と体部と口縁部の境に軽い段をもつもの（5）、稜、段をもたないもの（4）がある。1～3、6は底部から体部にかけて丸味をもつて外傾し口縁部が外反する。また、4は底部から口縁部まで丸味をもって外傾し、5は口縁部が直立気味に立ち上がる。底部は丸底である。器面調整は、口縁部外面に横ナデ、体部～底部外面にヘラケズリ、体部内面にナデ（1～3）、ヘラナデ（4、5）が施されている。

甕（第7図7～9）最大径が口縁部にあるもの（7）と体部にあるもの（8）がある。9については全体の器形を推測し得ない。7は体部が直線的に立ち上がり頸部でやや屈曲し口縁部が外反する。8は体部がふくらみをもって、細まりながら頸部に至り、「く」字状に外反屈曲する口縁部をもつ。器面調整は、口縁部外面に横ナデ、体部外面にヘラケズリ（7～9）、ヘラナデのうちヘラケズリ（8）、内面にヘラナデ（7、9）が施されている。9は底部外面もヘラケズリ調整が施されている。

## 第2住居跡

**【確認面・重複】** E～Gの3、4区地山面で確認された。第1、第2の2本の溝に切られている。

**【平面形・規模】** 平面形は隅丸長方形で、長軸5.3m、短軸4.7mである。住居内面積は22.9m<sup>2</sup>である。

**【堆積土】** 5層観察された。レンズ状の堆積状況を示し、3層が床面のほぼ全体を覆っており、5層は、壁沿いに認められる。

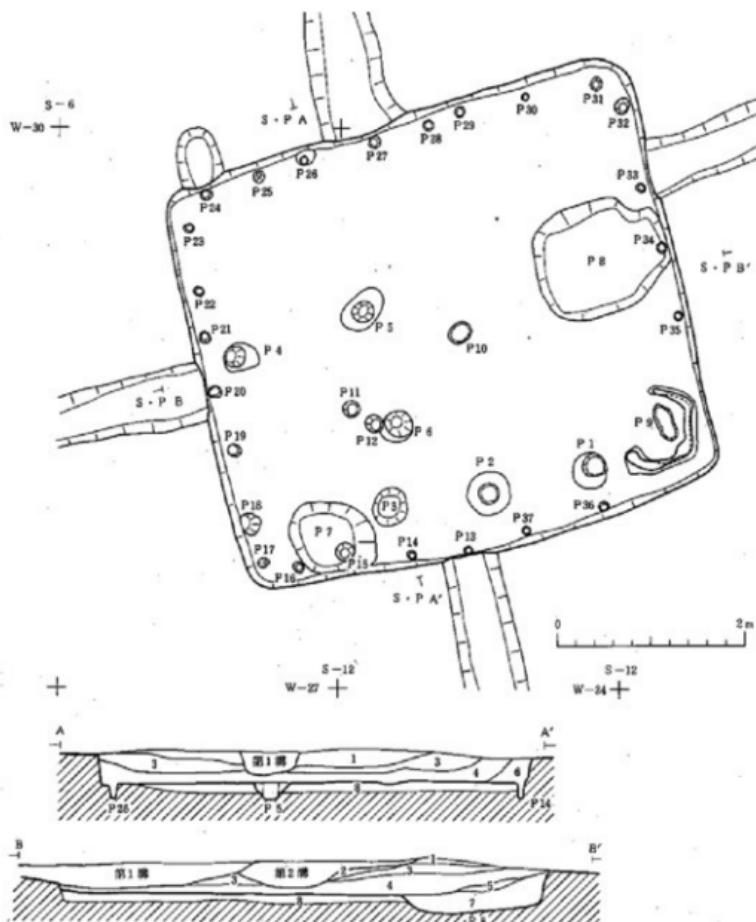
**【壁】** 地山を壁としている。溝に切られているものの全体に保存良く残っている。残存する壁高は最も高い東辺で約30cm、最も低い西辺で約10cmである。床面からはほぼ垂直に立ちあがっている。

**【床】** 北辺沿いの部分は地山を床面としているが、他の部分では掘り方埋土上面が床面になっている。前者は堅く、後者は軟弱である。全体として平坦な面をなしている。

**【柱穴】** 床面から37個のピットが検出された。このうちピット1、2、4、5、6、26では柱痕跡が確認されている。ピット13～37は、住居の壁沿いに認められ、径10～15cm、深さ10cm前後と共通性を示し、柱穴と考えられる。他にピット1～3は南辺沿いに約1.2mの間隔をおいて

第2住居跡ピット一覧

ピット番	北面	東面	南面	西面	ピット5	北面	東面	南面	西面	北面
深さ(cm)	31	31	35	35	29	15	16	26	26	27
土色	黒褐色 7.5YR 3/4									
土性	シルト									
腐朽	地山土埋入	地山土埋入	木炭埋入	木炭埋入	地山土埋入	木炭埋入	木炭埋入	木炭埋入	木炭埋入	木炭埋入
ピット6	ピット7	ピット8	ピット9	ピット10	ピット11	ピット12	ピット13	ピット14	ピット15	ピット16
27	27	21	13	12	15	14	10	9		14
黒褐色 7.5YR 3/4										
シルト										
木炭埋入	地山土埋入	地山土埋入	木炭埋入							
ピット17	ピット18	ピット19	ピット20	ピット21	ピット22	ピット23	ピット24	ピット25	北面	東面
9		11	13	8	10	11	12	12	7	7
黒褐色 7.5YR 3/4										
シルト										
			地山土埋入							
ピット27	ピット28	ピット29	ピット30	ピット31	ピット32	北面	東面	南面	西面	北面
10	7	8	10	11	11	9	8	14	7	8
黒褐色 7.5YR 3/4										
シルト										
地山土埋入	地山	地山土埋入								



層位	範囲	土色	土性	備考
第1層	1	褐色褐色 (5 YR 10/6)	シルト	
	2	褐色褐色 (7.5 YR 10/6)	シルト	
第2層	3	黒褐色 (10 YR 10/6)	シルト	地山粒褐色 (7.5 YR 10/6)・皮付地頭入
	4	黒褐色 (7.5 YR 10/6)	地土質シルト	地山ブロック (褐色 (7.5 YR 10/6)) を多く混入
第3層	5	黒色 (7.5 YR 10/6)	シルト	地山粒 (褐色 (7.5 YR 10/6)) をわずかに混入する灰の層
	6	黒色 (7.5 YR 10/6)	シルト	炭化物をわずかに混入
第4層	7	黒褐色 (5 YR 10/6)	シルト	地山ブロック (褐色 (7.5 YR 10/6)) を多く混入
	8	褐色 (7.5 YR 10/6)	地土質シルト	褐色 (7.5 YR 10/6) を混入
基盤				

第8図 第2住居跡

て認められ、規模、配置、深さ等に共通性を示すことから柱穴と考えられる。すなわち、ピット1~3は主柱穴であり、ピット13~37は壁柱穴と考えられる。ピット1~3に対応するピットの検出はなく、主柱穴については十分な検討がなされない。

**〔周溝〕** 検出されなかった。

**〔貯藏穴状ピット〕** 東辺中央部に接しており、長軸1.4m、短軸1.3mの不正形のピット(P8)である。深さは約20cmで堆積土中に炭化物を多く含んでいる。

**〔その他の施設〕** 住居東南隅に壁から約20cm離れて、U字状に粘土で構築された遺構が検出された。カマドとも考えられるが、火熱を受けた痕跡、焼土等は認められず、その性格については不明である。

**〔出土遺物〕** 住居に伴なう遺物としては床面上出土遺物がある。

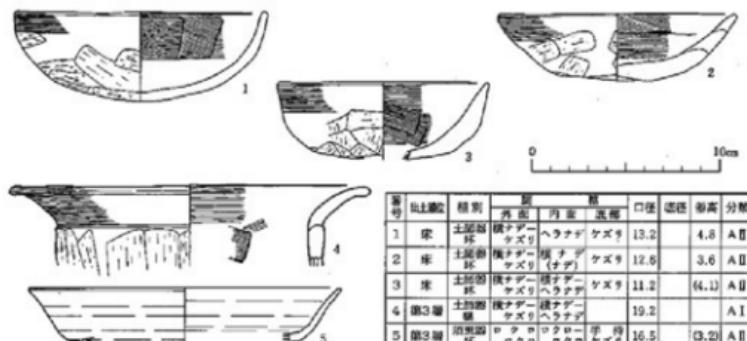
#### 〈土師器〉

壺(第9図1~3) いずれも体部の内外面に稜および段をもたないものである。1~3は外面口縁部に横ナデ、体部から底部にかけてヘラケズリが施され、内面口縁部は横ナデが施され、1ではその後ヘラナデが施されている。2、3の内面、体部にはヘラナデがみられ、2では粘土積み上げ痕跡も観察される。3は体部が内窪ぎみに立ち上がり体部が肥厚する。

#### 堆積土出土遺物

#### 〈土師器〉

甌(第9図4) 最大径が口縁部にある。頸部に軽い段が認められる。段から下の体部は直線的に立ち上がり、段から上の口縁部は外反する。器面調整は口縁部内外面とも横ナデ、体部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。



第9図 第2住居跡出土遺物

### 〈須恵器〉

壺（第9図5）体部から口縁部まで直線的に外傾し、体部下端に手持ちヘラケズリ調整が施されている。

### 第3住居跡

〔確認面・重複〕 FG-11、12区の地山面で検出された。重複はない。

〔平面形・規模〕 平面形はややゆがんだ隅丸方形で、規模は長軸約3m、短軸約2.7mである。住居内面積は8.43m<sup>2</sup>である。なお、南辺中央部に「コ」字状の張出し部がついている。

〔堆積土〕 4層観察された。ほぼレンズ状の堆積を示し、第3層が西辺および住居中央部の床面を覆い、第4層が東辺および南北辺沿いの床面を覆っている。

〔壁〕 地山を壁としている。床面からは比較的急角度で立ち上がり、残存する壁高は東辺が最も高く約36cm、最も低い北辺でも約12cmある。

〔床〕 挖り方埋土上面を床面としており軟弱である。床面は平坦で、西辺から東辺にむかって傾斜している。

〔柱穴〕 住居内から11個のピットが検出された。いずれも柱痕跡を確認できなかった。位置、深さ等から柱穴と考えられるものはない。

〔カマド〕 北辺中央部からやや東に偏したところに取り付けられている。平面形は「コ」字状を呈し、灰白色粘土で構築されている。燃焼部の規模は焚き口幅約45cm、奥行き約50cmで底面は火熱により赤変し堅くなっている。カマド内には天井部が崩落したと思われる灰白色粘土塊の堆積がみられた。煙道部、煙出し部は検出されなかった。

〔その他の施設〕 南辺中央部に長軸約1m、短軸約0.7mの「コ」字状を呈する張出し部がみられる。床面より約10cm高く、南辺に近い側に2個のピット（P11、12）がある。この張り出し部は出入口の施設とも思われ、2個のピットはこれに伴なう柱穴と考えられる。

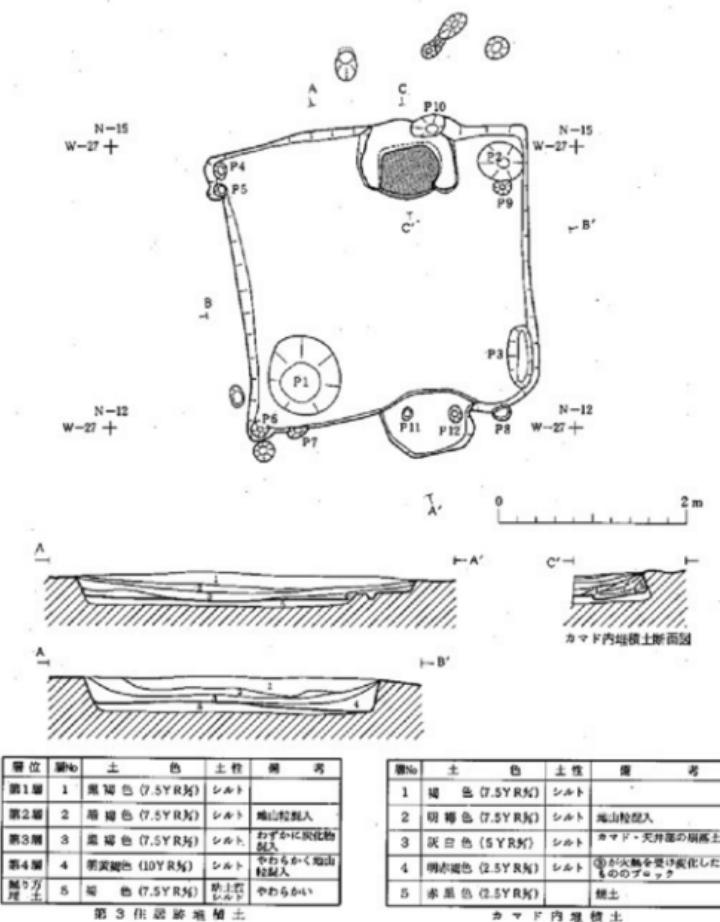
〔出土遺物〕 住居に伴なう遺物としては床面、カマド内出土遺物がある。

### 〈土師器〉

甕（第11図2）最大径が口縁部にあり、器高よりも大きいものである。底部からやや直線的に立ち上がり、口縁部はゆるやかに外反する。器面調整は、口縁部内外面に横ナデ、体部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。内外面とも粘土積み上げ痕が明瞭である。

### 第3住居跡ピット一覧

ピット番	ピット1	ピット2	ピット3	ピット4	ピット5	ピット6	ピット7	ピット8	ピット9	ピット10	ピット11	ピット12
保 索	41	40	8	3	7	17	9	8	4	15	7	9
土 色	暗褐色 7.5YR N 7.5YRN	赤褐色 7.5YRN		暗褐色 7.5YR N 7.5YRN	暗褐色 7.5YR N 7.5YRN	暗褐色 7.5YR N 7.5YRN				暗褐色 7.5YR N 7.5YRN	暗褐色 7.5YR N 7.5YRN	暗褐色 7.5YR N 7.5YRN
土 性	シルト	シルト									粘土質シルト	粘土質シルト
固 定												



第10図 第2住居跡

(須恵器)

甕（第11図4、第12図5）2点とも大甕で、口頸部が強く外反し、口縁部端面が上下につまみ出され稜を形成している。5は、最大径が体部にあり、底部は不安定な丸底風を呈する。頸部には2条の隆帯と3条の沈線、3段のヘラ描きによる波状文が施されている。頸部、体部の外面には平行タタキ目、内面にはアテ目が観察される。4は、口頸部から体部上半にかけての

資料で頸部に9条の沈線と3段のヘラ描きによる波状文が施されている。頸部、体部上半外面には平行タタキ目、体部内面には青海波文が観察される。

### 堆積土出土遺物

#### 〈土師器〉

壺(第11図1) 体部の内外面に稜、段をもたないものである。体部から口縁部まで丸味をもつて外傾する。底部は平底風を呈している。器面調整は、外面の口縁部が横ナデ、体部がヘラケズリ、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

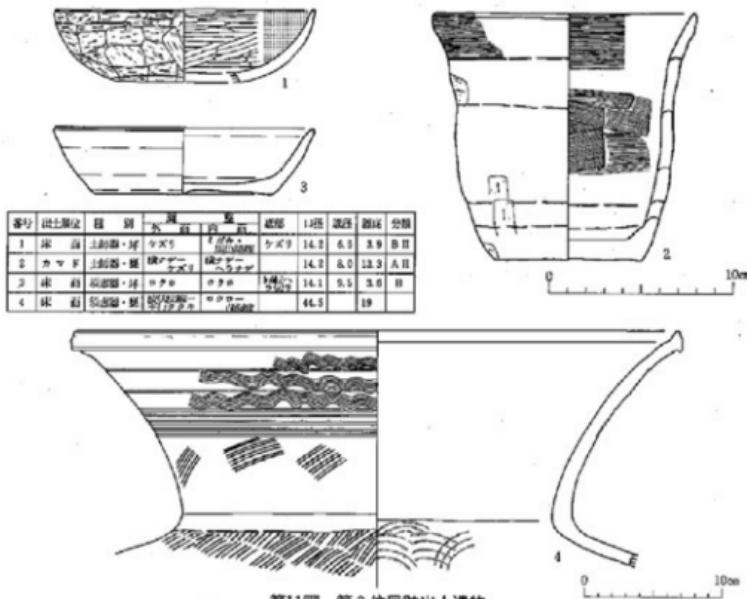
#### 〈須恵器〉

壺(第11図3) 底部の切り離しが回転ヘラ切りによるものである。内外面ともロクロ調整されている。

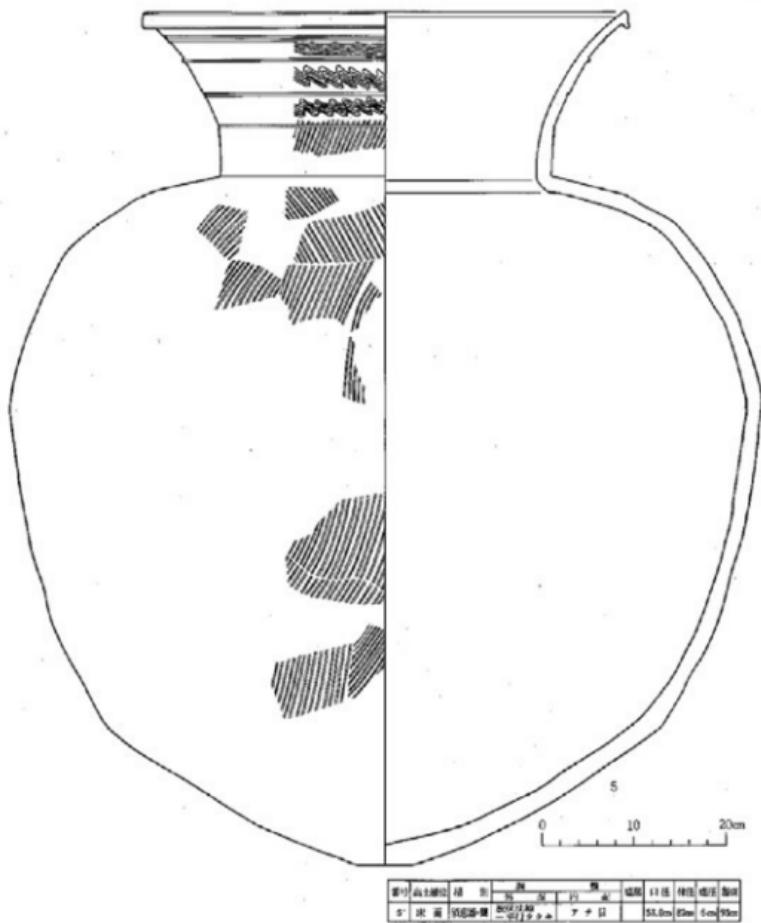
### 3. 溝

**第1溝:** 第2住居跡、第2溝を切っておりこれらより新しい時期のものである。底面幅は約30~40cm、深さ約10cmで東西方向に走っている。堆積土中から土師器壺・甕の破片、須恵器甕の破片が出土しているが、時期、性格については不明である。

**第2溝:** 第2住居跡を切り、第1溝に切られている。底面幅は約30~60cm、深さ約10~15cm



第11図 第3住居跡出土遺物



第12図 第3住居跡出土遺物

で南北方向に走っている。堆積土中から土師器壺・甕、須恵器甕・蓋の小破片が出土している。時期、性格については不明である。

#### 4. 遺構以外からの出土遺物

基本層位の第1層および第2層から出土したもので、縄文土器、土師器、須恵器、石製品がある。縄文土器については、破片としての出土のため器形も明らかではなく、また磨滅が激し

く文様等についても不明の点が多いので、出土したという事実だけの記載にとどめたい。

#### 〈土師器〉

坏（第13図1）底部から丸味をもって外傾し、口縁部は直立気味になる。底部は丸底である器面調整は口縁部内外面に横ナデ、体部、底部外面にヘラケズリ、体部内面にヘラナデがみられる。

#### 〈須恵器〉

高台付坏（第13図2）体下部に稜をもち、稜から上の体部は直立気味に外傾する。いわゆる椀形を呈するものである。体部下端に回転ヘラケズリ調整が施されている。

蓋（第13図3）内面にかえりをもっている。かえりの先端は口縁部以下に突出しない。天井頂部は欠損しているため不明である。

#### 〈石製品〉

砥石（第13図4、5）4は、両端を欠損しているが、平面形は短柵型を呈し、断面形はほぼ長方形である。表裏両側面を使用しており、細かな擦痕が観察される。石材は砂質凝灰岩である。一方、5はほぼ完形品で、平面形は頂面がやや丸味をおびている長方形を呈し、側面形は四分梢円形に近い形を呈する。表裏両側面、頂面の5面を使用しており、表裏面には擦痕が、側面には刺突痕がみられる。石材は凝灰岩である。

磨製石斧（第13図6）刃部を欠損している。平面形は頭部がやや丸味をもつが、胴部側縁との境にはわずかに稜がみられる。胴部は上半より下半の幅が大きい。継断面形はほぼ平行で横断面形は、ほぼ長方形で隅が丸くなっている。全体的に研磨されており、側縁部には研磨痕が観察される。石材は流紋岩である。

剥片石器（第13図7～9）7は、横長の剥片を利用したもので上半が折れている。上端から側縁にかけては両面からの調整剝離がみられ、下端では腹面からの調整剝離がみられる。石材は硅化細粒凝灰岩である。8は、玉髓を石材とした横長の剥片である。調整剝離はみられない。9は自然打面で背面に縦方向の剥離面が観察される。石材は凝灰岩質頁岩である。

## IV. 遺構、遺物に関する考察

### 1. 出土土器の分類

出土土器には土師器、須恵器、縄文土器があるが、縄文土器については、磨滅が激しく、文様も明らかでないので、ここでは、土師器、須恵器について述べる。

〔土師器〕 土師器には、坏・甕がある。破片として出土するものが多く、全体の器形については明らかにできない点が多いが、図示できたものを対象に分類を行なってみる。



石器計測表

図版番号	種別	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石材	地点 層位
第一回	砥石	(65)	(35)	(20)	(50.5)	砂質凝灰岩	F - 7 1
第二回	砥石	22	47	42	16.5	凝灰岩	F - 5 2
第三回	磨製石斧	(28)	(18)	(10)	(8.6)	花崗岩	K - 3 2
第四回	剥片石器	88	45	16	3.5	硅化細粒凝灰岩	K - 6 2
第五回	剥片石器	20	52	6	5.6	玉髓	1
第六回	剥片石器	33	51	8	18.5	凝灰岩質頁岩	2

( )内は欠損品

第13回 遺構以外からの出土遺物

**坏**：坏は製作に際し、ロクロを使用していない。器形の特徴から2類に分類される。

A類 底部形態が丸底のものである。

B類 底部形態が平底のものである。

以上の各類は、器形細部、器面調整の特徴などからいくつかに細分される。

**〈坏A類〉** 底部形態が丸底のものである。体部に稜をもつものをA I類、体部に稜、段をもたないものをA II類とする。

A I類 丸底で体部に稜をもつものである。体部は稜の部分まで丸味をもって外傾し、稜から上の口縁部は外反する(a類)。器面調整は、口縁部が内外面とも横ナデ、体部、底部は外面がヘラケズリ、内面はナデカヘラナデが施されている。内面に黒色処理は認められない。

A II類 丸底で体部に稜、段をもたないものである。体部は丸味をもって外傾し、口縁部が外反するもの(a類)、と外傾するもの(b類)がある。器面調整は、口縁部内外面に横ナデ、体部外面にヘラケズリ、内面にナデ、ヘラナデが施されている。内面に黒色処理は認められない。

**〈坏B類〉** 底部形態が平底のものである。体部に段をもつものをB I類、体部に稜、段をもたないものをB II類とする。

B I類 平底で体部に段をもつものである。段の位置は、体部上半口縁部との境にあたる。体部は段の部分まで丸味をもって外傾し、口縁部は直立気味になる(c類)。器面調整は、口縁部内外面積ナデ、体部底部外面にヘラケズリ、体部内面にヘラナデが施されている。内面に黒色処理は認められない。

B II類 平底で体部に稜、段をもたないものである。体部から口縁部まで丸味をもって外傾している(b類)。器面調整は、外面にヘラケズリ、内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。

**甕**：図上復原できたものは1点だけで、他は破片実測によるものが多く、全体の器形の知れるものは少ない。ここでは最大径の位置による分類だけにとどめる。

A類 最大径の位置が口縁部にあるもの。

土器類坏分類表

底部型態	体 部	口 縁 部	器 面 調 整
A. 丸 底	I 稜あり	a 外 反	
	II 稜、段なし	a 外 反	
		b 外 傾 c 直 立	
B. 平 底	I 段あり	c 直 立	内面黒色処理
	II 稜、段なし	b 外 傾	

B類 最大径の位置が体部にあるもの。

**〈甕A類〉** 最大径の位置が口縁部にあるものである。体部が直線的に立ちあがり、頸部で屈曲し口縁部が外反するものをA I類、体部から直線的に立ちあがり、口縁部がなめらかに外反するものをA II類とする。

A I類、体部が直線的に立ちあがり、頸部で屈曲し口縁部が外反するものである。頸部にわずかに稜がみられるものもある。全体的には長胴形を呈すると思われる。器面調整は口縁部が内外面横ナデ、体部外面がヘラケズリされている。ヘラケズリの前段階の調整として刷毛目のみられるものもある。体部内面はヘラナデが施されている。

A II類、体部から直線的に立ちあがり、口縁部がなめらかに外反するものである。全体的には鉢形を呈するものと思われる。器面調整は、口縁部が内外面横ナデ、体部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。粘土積み上げ痕の明瞭なものもみられる。

**〈甕B類〉** 最大径の位置が体部にあるもので、図示できたものは1点だけである。体部がふくらみをもち、だいたいに細まりながら頸部に至り、頸部で「く」字状に屈曲し外反する。口縁部をもつ、器面調整は口縁部が内外面横ナデ、体部外面ヘラケズリである。またヘラケズリの前段階の調整としてヘラナデがみられる。内面の調整については磨滅のため不明である。

**〔須恵器〕** 須恵器には壺・高台付壺・甕・蓋があるが甕については、分類が不可能である。他のものも土師器に比して出土量が少なく図示できたものも限られているが分類を行なってみる。

**壺：** 器形はいずれも体部から口縁部にかけて直線的に外傾するものである。底部の形態で2類に細分される。

**〈壺A類〉** 底部が丸底風を呈するものである。再調整として底部に回転ヘラケズリの施されているものをA I類、手持ちヘラケズリの施されているものをA II類とする。

**〈壺B類〉** 底部が平底で切り離し手法が回転ヘラ切りによるものである。再調整はみられない。

**高台付壺：** 器形の違いから2類に細分される。

**〈高台付壺A類〉** 底部径が大きく、底部と体部の境は丸味をもち盤状を呈するものである。高台は低く、わずかに外にふんばっている。底部には回転ヘラケズリ調整が施されている。

**〈高台付壺B類〉** A類に比して底部径が小さく、体部下半にわずかに稜をもち稜から上の体部が直立気味に外傾する。いわゆる椀形を呈するものである。体部下端に回転ヘラケズリ調整

土師器甕分類表

最大径の位置	頸部・口縁部	備考
A. 口縁部	I 屈曲 外反	長 豊 形
	II 外反	鉢 形
B. 体 部	屈曲* 外反	-

が施されている。

**蓋**：内面にかえりをもつものをA類、もたないものをB類とする。

〈**蓋A類**

〈**蓋B類**

## 2. 出土土器の年代

出土土器はそれぞれ前項のように分類され、それらは各住居跡内で以下のような共伴関係がみられた。

	土師器坏	土師器甕	須恵器坏	須恵器甕	須恵器台付坏	須恵器蓋
第1住		A I・A II	A I		A	B
第2住	A II					
第3住		A II		O		

すなわち、各住居跡内で共通する土器は、土師器甕A II類が第1住、第3住で認められるだけであり、他の類に関しては単独で出土するものが多く、セット関係をとらえることは困難な状況である。第1住居跡の床面からは、土師器坏A I類、A II類が出土しているものの後述するように住居に伴うものとは思われ難く、ここでは、各類を個別に検討し年代を与えることにする。

はじめに土師器について考えてみる。東北地方南部における土師器の編年研究は氏家和典氏によってその大綱が示され、その後の氏の一連の研究、桑原滋郎氏、阿部義平氏等により内容的検討が壺型土器を基にしてなされている。これら一連の研究成果に比定させ、本遺跡出土の土師器の年代を位置づけることとする。

坏A類は底部が丸底で、A I類は体部に稜をもちA II類は稜、段をもたないものである。器面調整は、口縁部内外面に横ナデ、体部外面にヘラケズリ、内面にナデ、ヘラナデが施され、内面に黒色処理は認められない。A I類の坏は、角田市住社遺跡、同田町裏遺跡、白石市北無双作遺跡などの集落跡から出土したものに類似した特徴を示している。これらの遺跡では古墳時代後期住社式期に比定しており、A I類もこの時期のものと思われる。またA II類と器形的に類似しているものは、古川市引田遺跡、仙台市岩切鴻ノ巣遺跡、栗遺跡、小牛田町前遺跡、志波姫町糖塚遺跡などで出土しているが、栗遺跡、糖塚遺跡出土のものは、内面に黒色処理が施されている点において本類とは異なる。また、引田遺跡、岩切鴻ノ巣遺跡出土

のものは、いずれも内外面にヘラミガキが認められる点において若干異なっている。山前遺跡出土のものは、外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施され、本遺跡のものと器形、調整の両面において類似点が認められる。山前遺跡のものは住社式期に比定されており、A II類も同期のものと考えられる。

坏B類は、底部が平底のもので、B I類は体部上半口縁部との境に段をもち、B II類は、体部に段、稜をもたないものである。B II類は、段から上の口縁部が直立気味に立ち上がり、A類同様の器面調整を示す。本類と類似のものは、仙台市栗遺跡、名取市清水遺跡、岩切山町川北横穴6号墳などで出土しており、住社式期に比定されている。一方、B II類は、体部から口縁部までやや丸味をもって外傾するものである。外面は全面がヘラケズリ調整され、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。本類のものは、桑原滋郎氏による砂押川D類と類似しており栗開式に比定できよう。

甕の検討をしてみる。甕A I、A II類は、ともに最大径の位置が口縁部にあり、A I類はいわゆる長胴形、A II類は鉢形を呈している。器面調整は口縁部内外面に横ナデ、体部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデ、ナデが施されている。またB類は、最大径が体部にあり、体部がふくらみをもっている。このような特徴を示す甕は、住社式期から国分寺下層式期の各地の遺跡にみられるものであり、坏型土器との共伴から年代を決めている現段階においては、個々についての年代は与え難い。従つて甕の年代は広くおさえて住社式期から国分寺下層式期のものとしたい。

次に須恵器の年代について考えてみたい。須恵器坏の編年研究は岡田茂弘氏、桑原滋郎氏によってなされ、奈良、平安時代のものについてはその内容が明らかにされている。また、古窯跡研究会による仙台市大蓮寺窯跡の調査により、5世紀中葉から東北地方においても須恵器の生産が行なわれていたことが明らかになるなど、各地の窯跡の調査結果から編年研究もその内容が詳細になりつつある。土師器同様に他遺跡出土のものと比較しながら本遺跡出土の須恵器の年代を考えることにする。

坏A I、A II類は丸底風を呈し、A I類は体部下半から底部に丁寧な回転ヘラケズリの再調整が施され、こと再調整により体部と底部の境界が明瞭な稜をなしている。また、A II類は、手持ちヘラケズリにより、体部と底部を区画している。A I類の口縁部内面には軽い段が認められ、口縁端部は丸くおさめられている。いずれも、口径に対する底径の比は大きく、器高は低い。A I類は涌谷町長根A地区1号窯出土のものや、涌谷町中野横穴2号墳出土のものに類似しており、8世紀初頭の年代が考えられる。また、A II類は器形的に福島市小倉寺高畠窯跡出土のものに似ている。高畠窯跡出土のものには、再調整として回転ヘラケズリを加えているものと手持ちヘラケズリを加えているものがある。A I類同様に8世紀初頭のものであろう。

次にB類の坏であるが、底部切り離し手法が回転ヘラ切りで再調整の認められないものは、糠塚遺跡、高清水町手取・西手取遺跡など奈良時代から平安時代前半ぐらいの遺跡に多く認められており、8世紀の中葉から9世紀前半の年代が考えられる。

高台付坏A類は底部径が大きく、丸底風を呈し、低い高台がついている。いわゆる盤状を呈し、底部には回転ヘラケズリの再調整が加えられている。本類は長根窯跡や堺市陶邑MT21号窯（第IV型式第1段階）出土のものに類似しており、8世紀初頭と考えられる。また、B類のものはA類に比して底部径が小さく器高が高いもので、体部下半にわずかに稜がついている。体部下端に回転ヘラケズリの再調整が施されている。本類は坏B類と同様の出土を示し、8世紀中葉から9世紀のものと考えられる。

甕は大形のもので、口縁部に3段のヘラ描き波状文が施されている。口縁部には隆帯や沈線が認められ、陶邑古窯跡などで出土している8世紀以前の甕類に似ているが、6世紀代のものとは、口縁部のつくりに差異がみられることから、ここでは、7世紀代のものとしておく。

蓋A類は天井部がゆるやかで、内面にかえりをもつ。内面にかえりをもつ蓋は、県内では中新田町城生遺跡、三本木町山畑横穴10号墳、築館町木戸遺跡などから出土しているが、器形的に本類とは異なっている。最も本類と似ているものは、陶邑TK217号窯（第III期）出土のもので、7世紀後半と考えられており、本類も同時期に比定できよう。蓋B類は天井頂部に扁平な宝珠形のつまみをもち、天井部から口縁部まで丸味をもつもので、口縁端部が下方に折れ曲る。内面にかえりはみられない。天井部外面には回転ヘラケズリによる再調整が加えられている。本類は坏A I類、高台付坏A類同様に長根窯跡出土のものに極めて類似しており、8世紀初頭のものと思われる。

### 3. 積穴住居跡の年代

前項において出土遺物を分類し、各々に年代を与えた。ここでは出土遺物から積穴住居跡の年代を考えてみたい。

第1住居跡では前述のような土器の共伴が認められた。すなわち土師器坏A I類、A II類、甕A I、A II類、須恵器坏A類、高台付坏A類、蓋B類がそれである。土師器坏A I類、A II類は住社式期に比定できるものであり、甕A I、A II類は住社式期から国分寺下層式期のものである。また、須恵器は各類とも8世紀の初頭のものであり、土師器坏との間に年代差が生じている。土師器坏と須恵器各類の同時存在は考え難く、土師器坏A I類、A II類は床面からの出土ではあるものの、混入品と考えた方が妥当と思われる。従って第1住居跡の年代は須恵器の年代から8世紀初頭と思われる。

次に第2住居跡の年代を観てみる。床面から出土している土器は土師器坏A II類である。従って住社式期のものと思われる。

第3住居跡では土師器甕A II類、須恵器甕の出土があり、土師器甕は住社式期から国分寺下層式期、須恵器甕は7世紀代のものである。従って竪穴住居跡の年代も同期に比定できる。

#### 4. 竪穴住居跡の考察

発見された竪穴住居跡は3軒で平面形は方形を基調としている。規模は一辺3m前後のものから6.5m前後のものまでありばらつきがある。柱穴は、第1住居跡が対角線状に4本配置されるのに対し、第2住居跡では壁下に沿って24本検出されており建物の構造を考える上に興味深い。規模の最も小さい第3住居跡では柱穴が検出されなかった。仙台市栗遺跡においては規模の小さい住居跡では柱穴が検出されない傾向があることが指摘されている。床面の状況は第3住居跡が全面に第1住居跡では住居四隅に、第2住居跡では北辺側に貼り床がみられ、構築上の差がみられる。カマドは、第1、第3住居跡で検出されたが、第1住居跡のカマドは壁外に地山を掘り込んで構築しているのに対し、第3住居跡のものは、壁に接して内側に「コ」字状に粘土で構築され、形態的に異なっている。第1住居跡と第3住居跡では年代差があり、構築方法の差はこの年代差によるものなのか、今後の同時期の類例を待つて検討したい。

### V. ま と め

1. 山ノ上遺跡は志波姫町と築館町の境界付近、標高約30mの台地上に立地している。
2. 発見された遺構には、竪穴住居跡3軒、溝2本がある。出土遺物には、縄文土器、石器、土師器、須恵器、土製品がある。
3. 出土遺物の年代から、竪穴住居跡の年代は、7世紀から8世紀初頭が考えられる。
4. 溝の年代については不明である。
5. 調査区は台地のごく一部であり、遺跡の範囲はさらに広がるものと思われる。

## 参考文献

- 斎藤吉弘（1979）：『宇南遺跡』「宮城県文化財調査報告書第59集」
- 小井川和夫、手塚均（1978）：『糠塚遺跡』「宮城県文化財調査報告書第53集」
- 氏家和典（1957）：『東北土師器の型式分類とその編年』「歴史第14輯」
- 阿部義平（1968）：『東国の土師器と須恵器—多賀城外の出土土器をめぐって』「帝塚山考古学No.1」
- 桑原滋郎（1976）：『東北北部および北海道の所謂第1型式の土師器について』「考古学雑誌第57巻3号」
- 志間泰治（1958）：『宮城県角田町住社発見の堅穴住居跡とその考察』「考古学雑誌第43巻4号」
- （1965）：『田町裏遺跡調査概報』「宮城県文化財調査報告書第8集」
- 宮城県白石高等学校郷土研究部（1969）：『齊川流域および北無双作遺跡の出土遺物について』  
郷土研究部研究誌第15号
- 氏家和典、大場恒一（1954）：『宮城県高倉村引田出土の土師器』「歴史第8輯」
- 白鳥良一、加藤道男（1974）：『岩切鴻ノ巣遺跡』「宮城県文化財調査報告書第35集」
- 東北学院大学考古学研究部（1979）：『栗遺跡発掘調査報告書』「仙台市文化財調査報告書第14集」
- 加藤道男他（1976）：『山前遺跡』「宮城県小牛田町教育委員会」
- 平重道他（1970）：『宮城県玉造郡岩出山町川北横穴群発掘調査報告書』岩出山町史下巻
- 岡田茂弘、桑原滋郎（1974）：『多賀城周辺における古代杯形土器の変遷』「宮城県多賀城跡調査研究所紀要I」
- 渡辺泰伸、結城慎一（1976）：『仙台市大蓮寺窯跡発掘調査報告』「陸奥国官窯跡群II」
- 佐々木茂樹、桑原滋郎（1971）：『長根窯跡』「涌谷町教育委員会」
- 平安学園考古学クラブ（1966）：『陶邑古窯跡群I』
- 氏家和典、佐々木茂樹（1973）：『追戸、中野横穴群』「宮城県涌谷町教育委員会」
- 福島市教育委員会（1969）：『福島市小倉寺高畠遺跡発掘調査報告』「福島市の文化財」
- 早坂春一、阿部恵（1980）：『手取、西手取遺跡』「宮城県文化財調査報告書第63集」
- 中新田町教育委員会（1977）：『城生遺跡』「中新田町文化財調査報告書第1集」
- 宮城県教育委員会（1973）：『山彫装飾横穴古墳群発掘調査概報』「宮城県文化財調査報告書第32集」
- 森貢喜（1980）：『木戸遺跡』「本書所収」

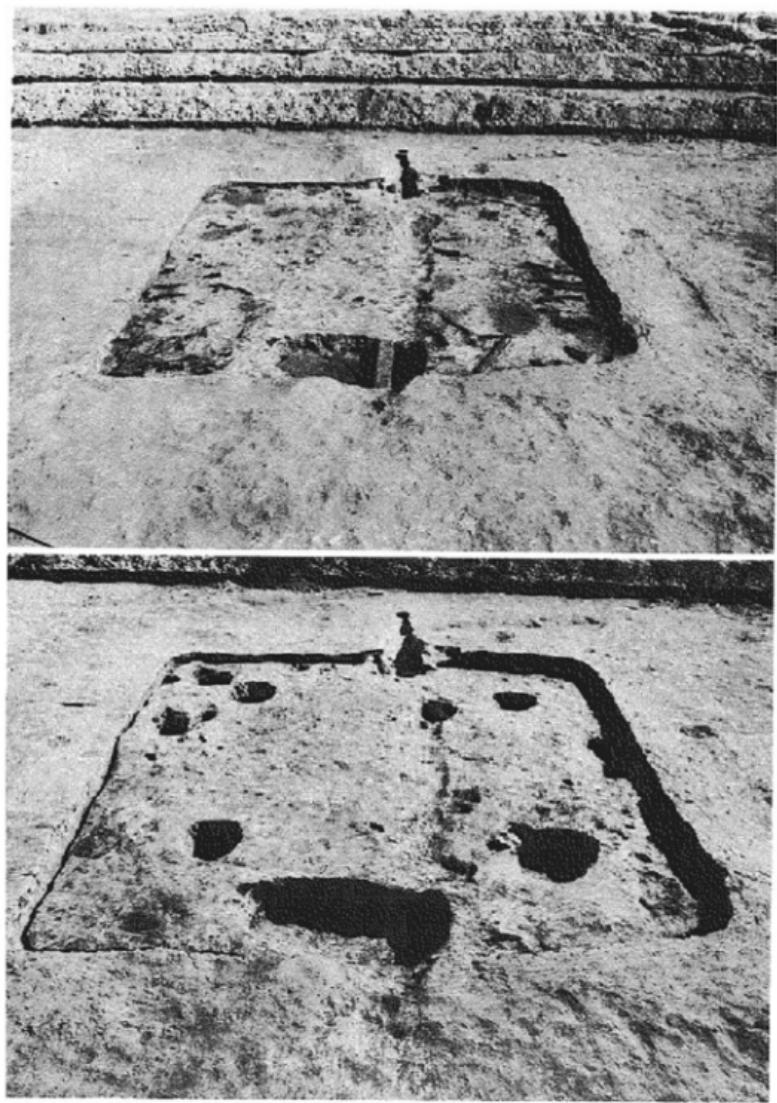
山ノ上遺跡破片集計表

階	級	部	科	第1回試験				第2回試験				第3回試験				通	優	良	可	不							
				1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4												
上 級	外語 英語	英語 英語	英ナーバルナダ	3	14	5		1	2	3	2					2	1			29							
			英ナーバルナダ	2																1							
		英語 英語	英ナーバルナダ(英)																	1							
			テルマーブル	2																2							
			カズリーナー																	4							
	英語 英語	不	第一種ナダ	1																2							
		不	第一種ナダ(英)	1																2							
		不	第一種ナダ	2																6							
		カズリーナー	カズリーナー	5	2															17							
		カズリーナー	カズリーナー	21	7															27							
中 級	英語 英語	カズリーナー	カズリーナー	2																5							
		カズリーナー	カズリーナー	4	10															36							
		不	第一種ナダ																	7							
		カズリーナー	カズリーナー																	6							
		カズリーナー	カズリーナー	1																12							
		カズリーナー	カズリーナー																	5							
	英語 英語	カズリーナー	カズリーナー	3	8	6														65							
		カズリーナー	カズリーナー	2	3															25							
		不	第一種ナダ																	2							
		不	第一種ナダ	18																19							
		カズリーナー	カズリーナー																	15							
低 級	英語 英語	カズリーナー	カズリーナー	15	18	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	102							
		カズリーナー	カズリーナー	27	23	8	2	2	1	1	3	4	2	2	10	6	10	22	9	217							
		カズリーナー	カズリーナー	30	34	12	1	1	4	6	1	49	20	3	6	13	14	2	4	11	265						
		不	第一種ナダ																	9							
		不	第一種ナダ	1																7							
		不	第一種ナダ	26	18	2	1	1	1	1	28	9	3	4	5	2	1	122	26	260							
	英語 英語	カズリーナー	カズリーナー																	1							
		カズリーナー	カズリーナー																	3							
		カズリーナー	カズリーナー	1	2															9							
		不	第一種ナダ																	1							
		不	第一種ナダ	1																6							
低 級	英語 英語	ロタローラ	ロタローラ	2	1	1											1	1	1	9							
		ロタローラ	ロタローラ																	1							
		ロタローラ	ロタローラ																	1							
		ロタローラ	ロタローラ																	6							
		ロタローラ	ロタローラ																	1							
	英語 英語	手作レターゼ	(別の欄に記入)																	1							
		留	留	1	1															9							
		留	留																	1							
		留	留																	1							
		留	留																	1							
低 級	英語 英語	留毛	留毛														2	1		3							
		留子	留子																	3							
		留子	留子	1	1															1							
		留子	留子																	1							
		留子	留子																	1							
低 級	英語 英語	カズリーナー	カズリーナー																	1							
		カズリーナー	カズリーナー																	4							
		カズリーナー	カズリーナー	2																3							
計				120	176	33	5	4	3	8	4	21	6	232	113	5	26	47	16	4	8	19	10	269	36	2	1,232

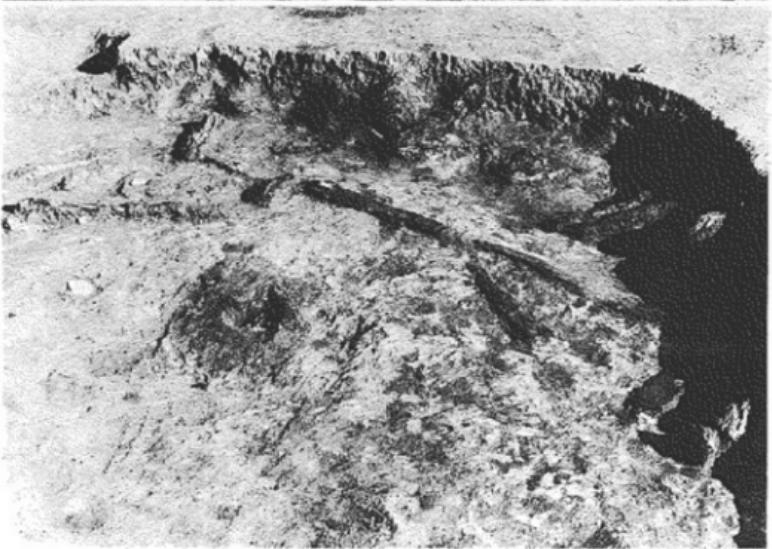
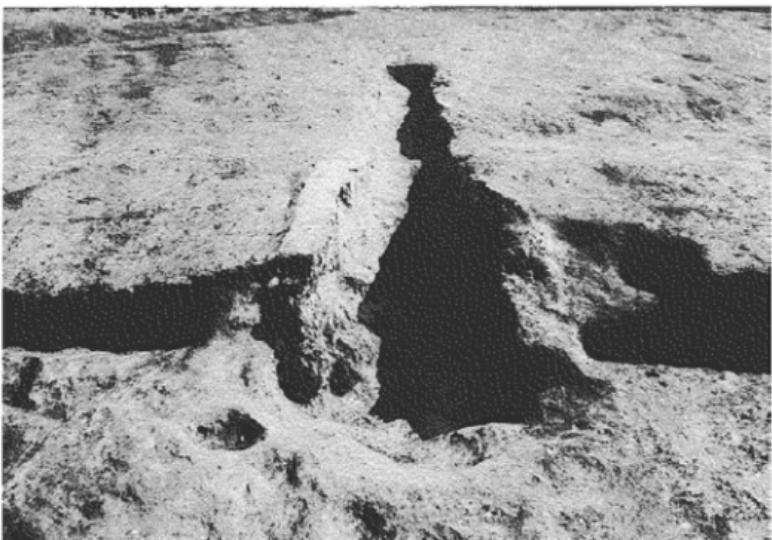
写 真 図 版



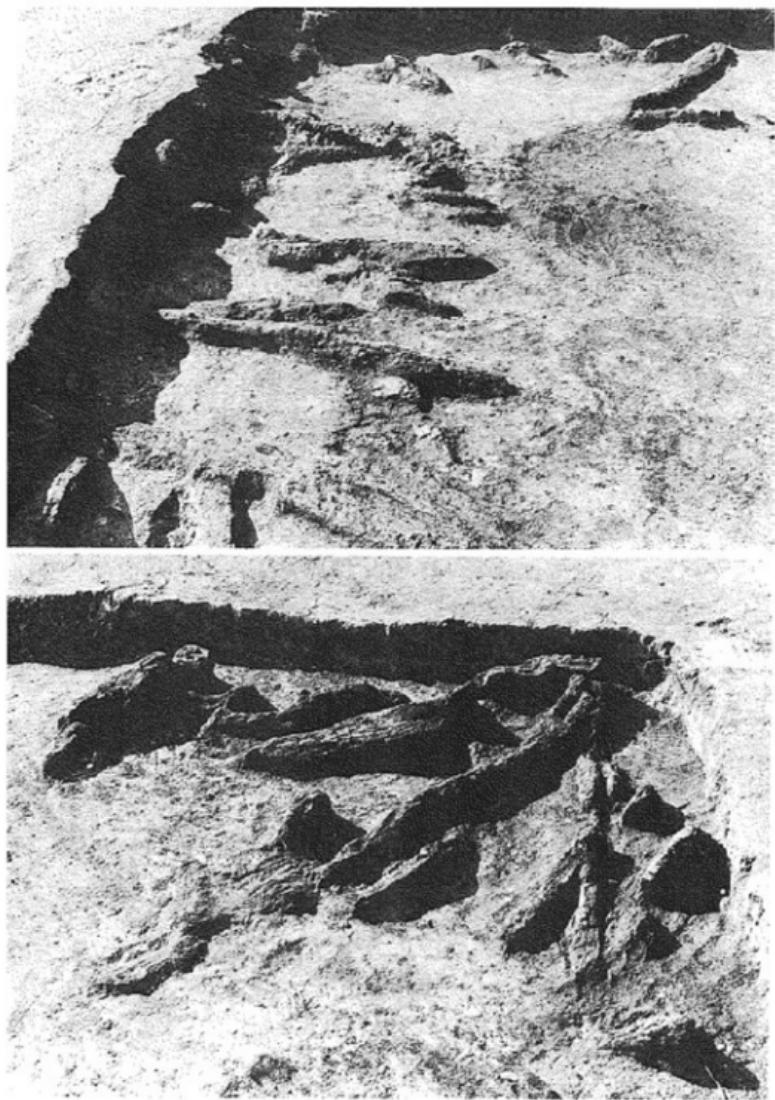
圖版 1 上、遺跡遺量  
下、充份風景



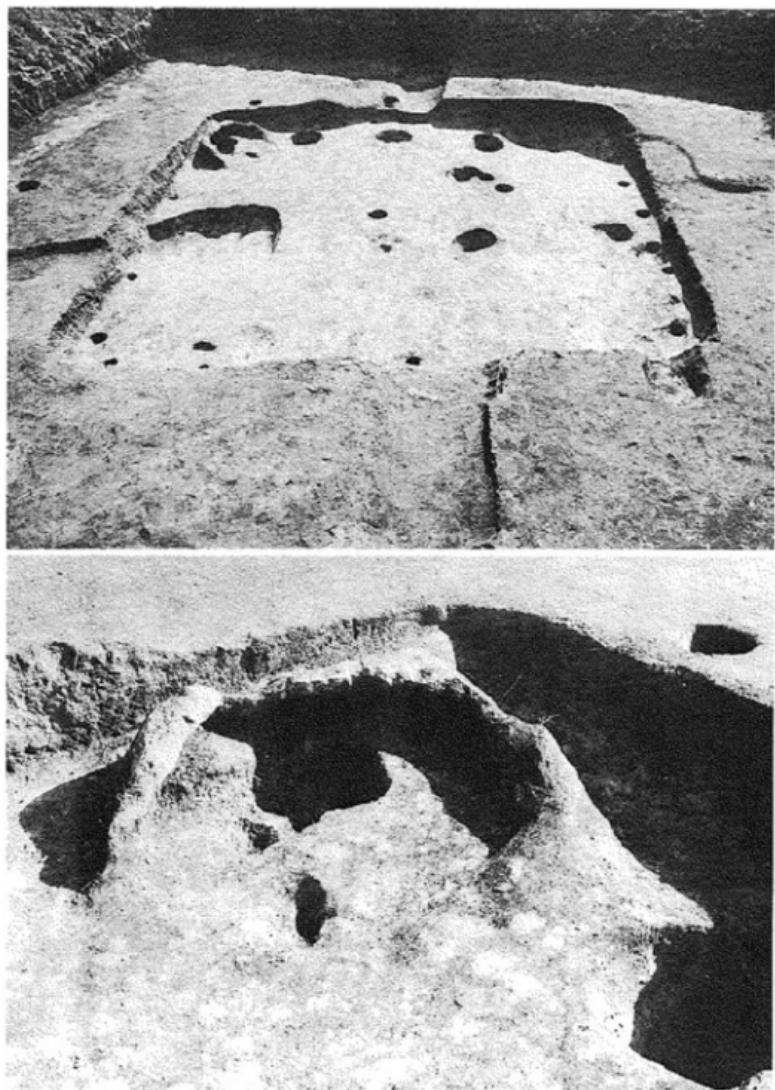
圖版2 第1住居跡



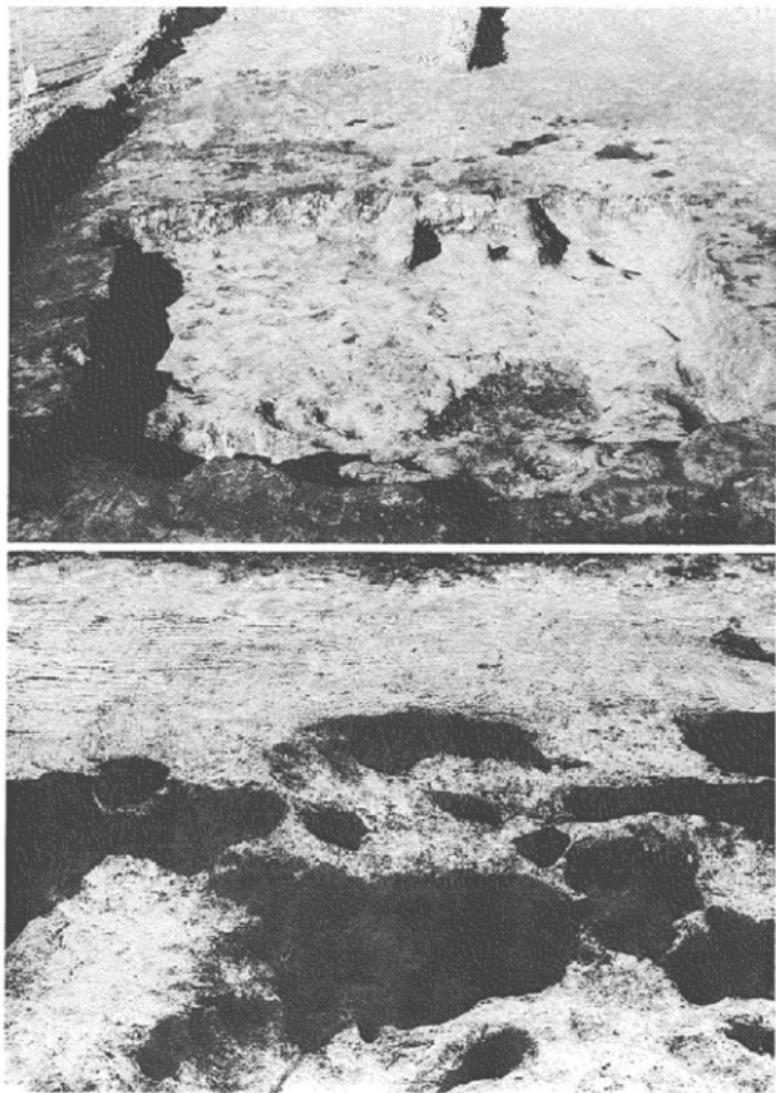
図版3 第1住居跡  
上、カマド  
下、炭化物



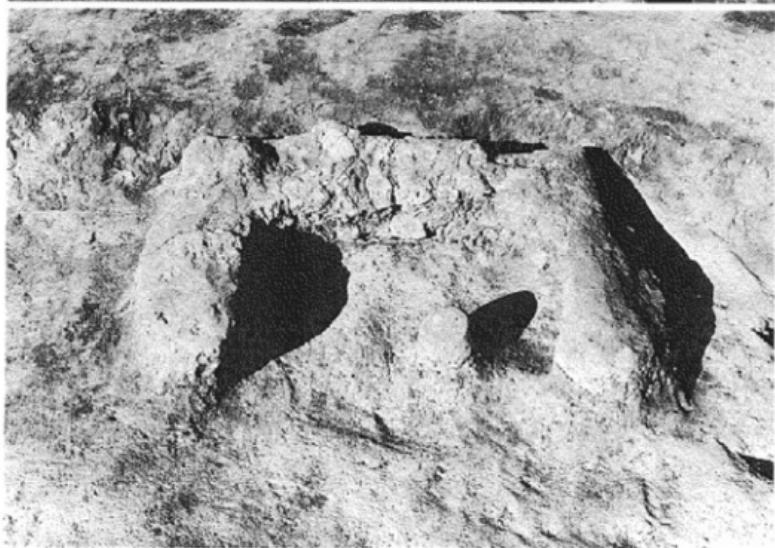
図版 4 第1住居跡 炭化物



図版5 第2住居跡



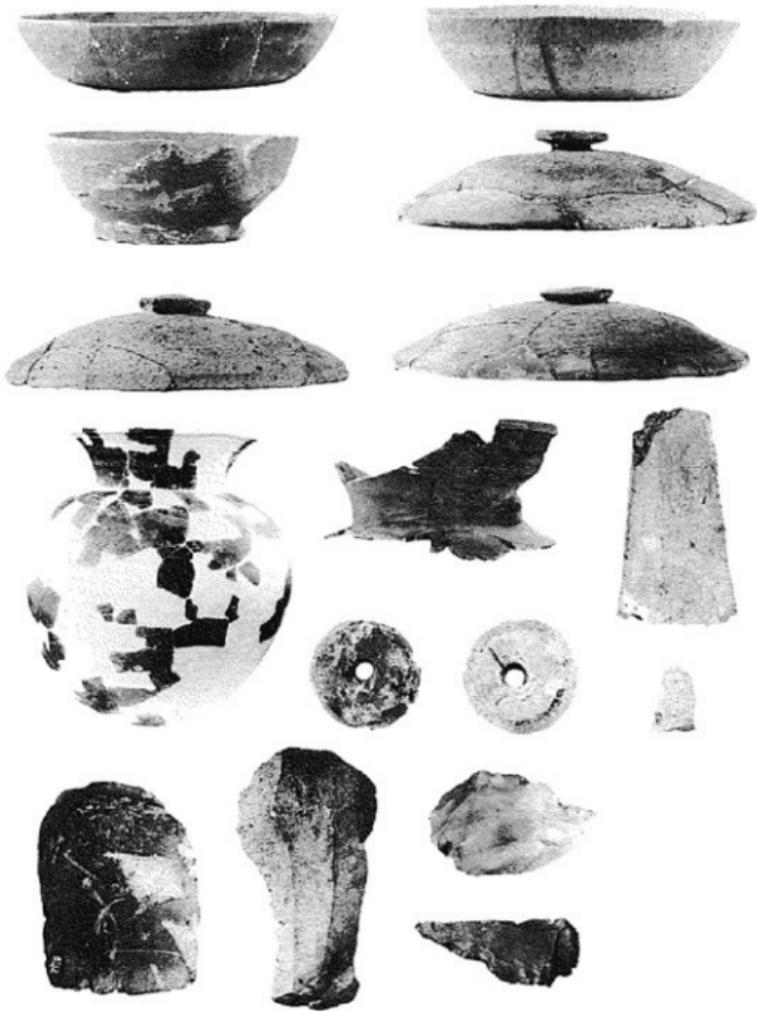
図版6 第3住居跡 下、出入口(?)



図版7 第3住居跡 カマド



圖版8 出土遺物



四版9 出土遗物